大阪商業大学学術情報リポジトリ

経済主体の創出―海保青陵の場合―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2023-09-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 邦泰, MORIOKA, Kuniyasu メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/2000336

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

経済主体の創出

―海保青陵の場合―

森　岡　邦　泰

1．はじめに
2．青陵のイデオロギー論
3．枢密賞
4．おわりに

1．はじめに

本稿は、江戸の時代の経世家、海保青陵（かいほせいりょう　1755－1817）の思想について、イデオロギーと経済主体の創出という観点から考察を行うものである。

まず従来の研究の一般的動向を確認しておこう。

通常、江戸時代の経世思想は、農本主義的自然経済観に基づき、貴穀賤金、尚農卑商論、棄利愛民などを唱えたと言われる。そこには「貴穀・尚農の自然経済こそが善である」[1)]という通念があった。しかるに青陵の思想は、そうした一般的傾向とは異なり、商業を肯定し、営利活動を認め、藩の財政再建を説くというような実学的志向性と、認識における合理主義的性格を持っていた点で、際立った特徴を備えていた。もっとも江戸時代も後期になると、現実に即した商業肯定の議論は他にも見られるが、青陵の場合、武士階級の立場から論じられたのが一つの特徴である。

青陵の思想上の課題は、富国である。近世の多くの経世家が倹約論を主張したのに対し、青陵の富国策は、倹約も説かれるがそれだけでなく、収入の増大、青陵の言葉で「興利」を図ることであった。その政策はこれまで藩単位の重商主義論と理解されてきた[2)]。すなわち藩の赤字体質を改善するためには、自国の産物を外部に売って（産物マワシ）他国の金を吸い取ること。しかも農民が個々に販売したのでは、足下をみられるので、藩がまとめて販売

1）松浦玲「江戸後期の経済思想」（岩波講座『日本歴史』第13巻）、1964年、124ページ。

2）松浦玲、上掲書、130ページ。典拠としてあげられているのは、次の一節。「豊公ノ故知ヲ以テ見レバ、一国一ト味方ニナリテ他国ノ金ヲ吸ヒ取ルトイフ法、甚宜シカルベシト思フ也。（中略）一国一ト味方ニナリテ、他国ノ金ヲ吸ヒ取ルトハ、産物マワシガ其機密也。今幸ニ、ドコノ国ニテモ、産物ヲマワスコトヲ、セワヲヤカズニオルコト、甚ヨキ手ガゝリナリ、上ニテ産物マワシノセワヲヤケバ、是民ト一ト味方ニナリテ、他国ノ金ヲ吸ヒ取ル也」。「稽古談」巻之五（『大系』323－333ページ）。ここで『大系』とは、塚谷晃弘・蔵並省自（校注）『本多利明　海保青陵』（日本思想大系44）1970年、岩波書店。以下このように記す。

し、規模の利益を得ることである。その場合藩当局は諸階層が一致して利潤追求するのを代表する形になる。

青陵のもう一つの著しい特徴として、君臣関係も含めて人間関係をすべて「ウリカヒ」として商品交換のアナロジーでとらえたことがあげられる。

さて従来の研究の多くは青陵の思想を上記のように近代的な商業肯定、重商主義などとして繰り返し確認してきた。本稿は、それとは違った観点から、上述のようにイデオロギー論の観点から青陵の経済思想の特徴を明らかにすることを課題とする。

2．青陵のイデオロギー論

イデオロギーの定義は論者によりさまざまであるが[3)]、18世紀のフランスのイデオローグの意味ではなく、近代的な意味はマルクス、エンゲルスに始まる。『西洋思想大事典』ではマルクス、エンゲルスの考えを「イデオロギーとは、大衆を操作・支配するために、自らの支配を永続させようと、支配階級によって捏造された虚偽のイメージの産物」と要約した[4)]。ここでは国家の目的にかなうように「イデオロギーは諸個人を『ひとりでに行為させ』」るもの[5)]、すなわち、イデオロギーのイデオロギーたる所以は、期待した行動を諸個人に自らの意志から行わせる点にあると理解することにしよう。次第に明らかになっていくように、イデオロギーをこの意味でとらえることが海保青陵の場合、有効だからである。

上記の引用はアルチュセールのものであるが、アルチュセールはさらに続けて、「国家のイデオロギー諸装置において現実化されるイデオロギーがどのように機能するのかを示す必要がある。そしてイデオロギーは以下の驚くべき、しかしごく『自然な』階級的結果を得るということも。すなわち具体的諸個人が『歩む〔動く〕』のであり、これら諸個人を『歩ませる〔動かす〕』のはイデオロギーである」[6)]といい、このように国家が諸個人に期待する行動を、諸個人に自発的に行わせるための装置がイデオロギー装置である、と述べる。そして「プラトンにとってそれは既知のことであった。……プラトンは、人民をひとりでに『歩ませる』ところの『高貴なる嘘』を幼少期からすぐ『人民』に教え込まねばならず、また人民が『歩む』ためには、人民がこれを信じ込むようなしかたでこの〈高貴なる嘘〉を教え込む必要がある、と理解していた」[7)]、という。

さて海保青陵の思想の著しい特徴は、人間がイデオロギー操作され得る主体であることを認識している点、また聖典とされた中国古典をイデオロギーとして把握している点、さらに民衆統治の技法として特定の思想をイデオロギーとして自覚的に活用しようとしている点に

3）テリー・イーグルトン『イデオロギーとは何か』平凡社、1999年、20-21ページ。
4）フィリップ・P.ウィナー編『西洋思想大事典』平凡社、1990年、「イデオロギー」の項目。
5）ルイ・アルチュセール『再生産について』西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳、平凡社、2005年、248ページ。
6）同書、250－251ページ。
7）同書、251ページ。そのプラトンの該当箇所は「おそらくわれわれの国の支配者たちは、支配される者たちの利益のために、かなりしばしば偽りや欺きを用いなければならなくなるだろう。われわれはたしか、すべてそうした手段は、いわば薬として役立つものであると言ったはずだ」プラトン『国家』459C～D。

ある。これを順に見ていこう。

まず人間がイデオロギー操作され得る主体であることを認識している点であるが、それは人間性向が慣習にとらわれやすいこと、満足・不満足の判別が多分に慣れに依存していることに求められる。例えば食事は昔は一日二回であった。しかし当時、京都・大坂・江戸では三回となっているのに、田舎（大宮、現在の富士宮市）では、５回であるから、人間は癖のつきようによってどうともなるという。だから癖をつけることによって民を操り養うことほど面白いものはない、という。「クセノツケヨウニテ、ドフトモナルモノナレバ、民ノ養ナヒヨウハ面白キモノナリ」なのである[8)]。つまり人は習慣に左右されるものだから、民衆の生活態度は為政者の操り次第となる。ここにイデオロギー操作の可能性があることを見て取っているのである。だから

> 民ノ行ギハ上ノアヤツリシダイ也。民ノ心ハ上ノ鼓舞シダイナリ[9)]。
> 上ノスルコトハ、トント下ヘ知レヌガ経済ノ上手也。民ガクセツケバ六々敷（むつかしき）コトニテモ知ル也。クセツカネバ、ヤスイコトニテモ民サトラヌ也[10)]。

という。つまり統治階級は人民に「クセ」をつけさせることによって、うまく「アヤツル」ことが必要なのである。いったん癖がつけば、それが常識となって疑問を抱かなくなる。京都・大坂・江戸では三回食事することに何ら疑念を抱かず、銘々「ウツカリトシテ、知ラズニオルコト」[11)] なのである。このようにしてイデオロギーを完成させればよいのである。つまり「クセ」をつけさせることにより、「ウツカリ」と「知ラズ」に、自発的に行動してしまうようにと。

かくして海保青陵は、プラトンの言う〈高貴なる嘘〉を、しっかり〈嘘〉として把握して、それによる民衆操作が可能であることを「アヤツル」という表現で的確に認識しているのだ。

このようにいったん「クセ」さえつけば、人間は逆にそれ以外の行動を取ることが困難になる。三都の民が五回食事をすることは「クルシキ」ことであり、今泉の民が三回食事することも「クルシキ」こととなるのである[12)]。このようにイデオロギーを習慣として獲得させることを目標にする。ここで習慣化するためには、性急な命令は禁物である。「急ニ箇様ニセイ」といってもうまくいかない。「ゼンゼンニクセツケバ、ドフトモナルモノナリ」[13)] なのだ。

それが可能なのは、人間の精神が可塑性をもっているからで、環境の影響を受けやすいからである。「人ノ身ニモ苦楽ナシ。苦楽ノ常住ト云フコトナキ」なのである[14)]。慣れ次第で苦痛と思うこともそうでなくなり、贅沢も贅沢と感じなくなる[15)]。

8）「稽古談」巻之四（『大系』306ページ）。
9）「稽古談」巻之四（『大系』308ページ）。
10）「稽古談」巻之四（『大系』305ページ）。
11）「稽古談」巻之四（『大系』306ページ）。
12）同上。
13）同上。さらに蝦夷人の風俗と京の風俗を比較して、同様な考察を続ける。
14）「稽古談」巻之五（『大系』330ページ）。

そしてこのように癖がつけば、人々の「目ガヒトツトコロヘ、ヒツツキテオルユヘ、目ヲ転ズルコト」[16] ができなくなってしまう。「目」という認識能力が、一定の箇所に固定化され、他の方向へ転ずることができなくなってしまう。こうして一方向のみの認識が可能となり、他の方向への認識的障害が形成されることによって、イデオロギーは完成される。習慣が認識能力へ及ぼす作用をイデオロギーとして把握している点が、青陵のイデオロギー論の特徴であろう。民衆が統治に不満を抱くかどうかは統治にとって重大な問題だから、「アヤツル」とした認識は重要である。

さて「アヤツリ」のもう一つの目標は、倹約を常とする経済主体へと作り上げることである。

> 民ヲ養フナドヽイフモノハ、民ヲフリカヘルコトニテ、カシコイ民ヲオトナシヒ民ニシ、奢侈ノ民ヲ倹素ノ民ニシヨフトイフ工夫[17]。

ここに述べられているように、民を養うとは、為政者が民を操作する技術で、それはまず賢い民をおとなしい民にすることである。民が賢明になりすぎると制御が困難になるからだろう。木石のような民ならいざ知らず、「後世ノ奸猾（かんかつ）ノ民、上ノスキマヲネラヒテ、欺カン」[18] としているからである。イデオロギー操作が可能なためには、当然、人民の心情に精通していなければならない。これまでの儒者は下賤の人の情を知っては下賤になるといっていたが、「大キニタワケナル」ことであった[19]。下賤の民を治めるには下賤の人の情を推し量らねばならないのである[20]。

ここで述べられているもう一つの点は、奢侈の民を倹素の民にすること。つまり倹約を旨とする経済主体の創造である。

> 目ニナレタルコトニハ、驚ソフナルコトニモオドロカヒデ、耳ニナレヌ言ハ、理ヲイフテキカセテモ驚ク。サレドモコヽガ至極ヨイトコロ也。……今民、倹素ハメヅラシフテ、見ナレヌユヘニアヤシム。奢侈ハナレタルコトユヘニ、メヅラシカラヌコトニ思フテ驚カヌナレバ、此民ヲ鼓舞シテ倹素ニ駆リテ、倹素ガ常ニナレバ、又奢侈ヲイヤナルコトニオモヒテ、奢侈ニオドロクニチガヒナキ也。民ノ行ギハ上ノアヤツリシダイ也。民ノ心ハ上ノ鼓舞シダイナリ[21]。

一応、「アヤツリ」というイデオロギー操作が習慣の力で説明されている点では首尾一貫

15）例えば、地位の高い人、田地を沢山もっている人（心の「人ガラ」のよい、心の「風俗」よい人）の息子が、芝居の役者を好んで、とうとう中間や役者になる人がはなはだ多い。しかし中間や役者は、心の「人ガラ」が悪く、心の「風俗」悪い人だ。従って、心は養いようで「上品」にも「下品」にも、「智者」にも「愚人」にもなるから、大いに「アヤツリヨフ」があることだ、という。「洪範談」（『全集』654ページ）。
16）「稽古談」巻之四（『大系』308ページ）。
17）同上。
18）「稽古談」巻之三（『大系』281ページ）。
19）同上。
20）同上。
21）「稽古談」巻之四（『大系』308ページ）。

しているが、果たしてこういう逆転が生じうるかどうかは別にして、苦しいことでも慣れてしまえば、人間は順応するから可能だとする[22]。

これまで見たように青陵が繰り返し強調するのは、民を「ウツカリ」として行動してしまうように「ハカラフ」ことであり、これはまさしくイデオロギーというものを理解していることを示していた[23]。このようにイデオロギー操作の真骨頂は、当人がそれと知らず自然に振る舞うようにすることであって、例えば「ブセウノ民ヲ、働ク民ニ鼓舞移転シテモ、民ウツカリトシテ鼓舞サレテ、知ラヌ証拠也」[24]とか、うっかりとして「忘ルゝ」[25]までに到ることと表現している[26]。

青陵はこのようなイデオロギー操作のことを「枢密」と呼ぶことがある[27]。「枢密」とは、たとえば、先王が天を祭ることや人民に報償を与えて鼓舞激励することなどによって、「アカラサマニ」先方に知らせはしないが、詰まるところ先方のためになることと定義する。これはあからさまに見せると人民が「合点」がいかないゆえ、人民が合点しようがしまいが、人民を「善道」へ導きさえすれば「ヨシ」としたものという。従って「枢密」はイデオロギー操作より広い概念でイデオロギー操作をその中に含むものである。操作される人民が、その真の目的を知らず（あるいは人民は愚民であるため、それを理解できないため）、上からの操作によってしかるべき目的を達成することである。

青陵があげている面白い例は、日蝕である[28]。日蝕は「日月ノ交会」、つまり天文現象にすぎない。さて、天子は天下をすべて所有しているが、どのようなこともしても構わないと思われては人民が服しない。そこで日蝕が起こった時、天が天子を「御責ナサル」として天に謝り、わびを言う。そうすると天もようやく天子を許して日蝕が元の通りになって、太陽が姿を現す。天子といえども「キマヽ」にすることはできない。気ままにすれば天が日蝕によって天子を責めるだろう。ゆえに天子の行為は天の承認にかなったことであるため、下々の民は天子の思し召しに背くことはできないということになる。そしてこれを枢密と呼んでいる。つまり日蝕に際して天子が何らかの行事を行うことを人民を納得させ統治するための技術、民衆操作のイデオロギーと見なしているのだ。そしてこのような「枢密」なくては天下国家を治めることはできないといっているのだ。つまり統治には何らかのイデオロギー操作が不可欠であること、それなくしては統治は不可能だという、極めて近代的・現実主義的

22）「稽古談」巻之四（『大系』310ページ）。青陵が青山侯の儒者をしていた頃、将軍が鷹狩りを行い、お供の大名の供回りが木綿の羽織、木綿のはんてん、木綿の股引という「人間ノウチノ第一ノ下賤ノ人ノ服」を着ていて、みな驚きそうなものだが、誰一人「ビツクリ」する者はいなかった。倹素であること、これより甚だしいものはないが、これを倹素と思う人は一人もいなかった。それは「ナレタルユヘ」だからだという。これは身分上の権威も関係していると思われる。「稽古談」巻之四（『大系』309ページ）。

23）「稽古談」巻之四（『大系』312ページ）。

24）「稽古談」巻之四（『大系』309ページ）。

25）「稽古談」巻之四（『大系』314ページ）。ここの、どのようして忘れさせるのか、が重要だと思われるが、それについての詳しい説明がない。

26）青陵は、民をうまく操作した例として、漢代の曹参（そうしん）の政治をあげる。青陵によれば、曹参の政治は、老子流で、人民が統治されているのを忘れてしまう、忘れさせるのを目標においているというが、しかしおそらく典拠と思われる『漢書』の該当箇所を見ても、曹参の政治のどこに民を「ウツカリ」と操作することができる仕組みがあるのかいまひとつ不明である。またその政治が老子流だという記述はないから、これは青陵の解釈となる。

27）「枢密談」（『全集』157ページ）。

28）同上。

な見方を呈示しているのである。

そして日蝕を使うような原始的なイデオロギー操作では、「下ノ民」の「智」が段々と進めば、もはや民衆を操作できなくなるから、より「上ノ」、より「巧」みな、つまりより進んだイデオロギー操作が必要となるだろう。さもないと人民は「合点」いかなくなるのである。それゆえ後世ではそれを枢密というという[29]。日蝕のような操作では今の人民なら笑ってしまうというから、枢密が必要なのである[30]。このように心の「アヤツリ」は「密」でなければならない、とイデオロギー操作を自覚的に説いている[31]。

また易経の繫辞の「言行ハ君子ノ枢機ナリ。言行ハ君子ノ天地ヲ動カスユエンナリ」を、心の「アヤツリ」と解釈している。易経のこの文言は、いわゆる天人相関を指し、中国古代の民俗信仰の表れだと思われるが、青陵は極めて近代的にこれを為政者が支配し統治するためのイデオロギー操作だと解釈しているのである[32]。

さて上記のように枢密の肝心な点の一つは時宜に応じて行うことにある[33]。君子は準備を調えて「時ヲ待テ動ク」ものである。適切な時宜を見計らうのが「人ノ智」で、枢密は「行フベキ時ニ行ハネバ時ヲハヅス」こととなり「時ヲ取リ失ヘバ」人民を掌握できなくなる。世の中は「昼夜ヤマズニ新シフカワリカワリスルモノ」で、世も民も一日一日と進む「活物」であるから、日蝕のような古代の人民に有効な手段に固執するのは「死智」で、活物に対応する「活智」が必要なのである。ここで青陵は世の中の変遷と人民の開化の度合いを把握してイデオロギーを臨機応変に使用することを主張している。こうした実践知を「活智」と呼んでいる[34]。

ところでどうして青陵は、イデオロギー操作の目標に倹約を常とする経済主体の創出をあげねばならなかったのか。

それは当時の社会状況の認識と青陵の人間観が背景にある。まず当時の社会状況であるが、こうした議論の背景には、実際に奢侈がかなりの速度で進行したという認識があった。青陵によれば、３代家光以降奢侈が進展した。例えば、荻生徂徠の『政談』に、近年髪を結う油や元結いができたとあるが、青陵の時代は、幼少の頃から一般化していて母親が油をつけて結ってくれたという。徂徠の話はわずか50年前の出来事だ。してみると厳有院様（４代将軍家綱）の頃は油も元結いもなかったであろう。であるから衣服飲食ももっと質素であったろう。今の田舎よりももっと質朴だから、今の山の中の民くらいの生活水準だったろう。しかし今の民のように小言を言うことはなかった[35]。これから推察するに、徂徠の頃の民はまだ小言を言うことに気がつかなかっただろう。しかるに今は生け簀料理屋へ行って高い料理を食うが、それでもとかく気に入らない[36]。このように奢侈がかなり実感できる形で進展したという証言を残している。

29）同上。
30）「枢密談」（『全集』157－158ページ）。
31）「枢密談」（『全集』158ページ）。
32）「枢密談」（『全集』158ページ）。例えば武内義雄『中国思想史』岩波書店、1957年、第１章、溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』東京大学出版会、2007年、４－５ページなどを参照。
33）「枢密談」（『全集』158ページ）。
34）拙著（『深層のフランス啓蒙思想』晃洋書房、2003年、終章）では、こうした知を「実践理性」と呼んだ。
35）「稽古談」巻之四（『大系』312ページ）。
36）「稽古談」巻之四（『大系』313ページ）。

このように奢侈が進めば、人間はそれで満足するかというと、そうではない。いくら奢侈が進展しても満足に到達しないのである。人間はそれまでの贅沢に慣れると、限りなくいっそうの奢侈を求める。人間の欲望は際限を知らない。

> 今ハ民ハ昇平ニナレテ、アリガタイト云フコトヲウチワスレ、煖衣飽食ヲシテモ楽ト思ハヌハ、ナレテナレコニナリタル也。ソコデ民ハ箸ノアゲオロシニモ、コヾトヲ云フ。不足ヲ云フ。怨ムコト平生也[37]。

だから、今まではもっと立派に、もっと美飲食、もっと美飲食と奢侈を進めてきたので、民をみな公卿にして、中間を乗り物に乗せ、大工に十万石とらせても、小言を言うに違いない。このようにどんなに富貴にしてやっても、富貴が常になると、また小言を言うのである[38]。これが人間本性というのである。

それは人間というものが欲望に限界を知らない生き物だからだ。それが青陵の人間観である。従って生活水準はどこまでも際限なく上がっていき「公卿」の水準まで達してしまうだろう。だから倹約を常とする経済主体となるように操ることによって、逆にそれを下げ「目アテハ草木トイフ処」[39] まで達するのが目標である。そしてそれに不満を抱かないように、イデオロギー操作する必要が生じるのである。

それは前論文でも記したように、農業社会では生産技術に限界があるため国富の総量が限定されていて、そのような飛躍的な生産増大の望めない状況下では、過剰な消費は社会の存続を危うくするからである。というのは再生産のためには次期の生産のための投資が必要だが、ほぼ単純再生産の社会では、過剰な消費は次期の生産の投資に食い込んでしまうからである。従って一般に伝統社会の常として、奢侈の抑制のイデオロギーはいつも存在するだろう。青陵も例外ではなく、奢侈抑制の必要を痛感しており、繰り返しそれを説いている。というよりも前近代の農業社会の思想家で、資本主義社会のように消費を美徳と見なしたものはほとんどいないだろう。

過剰消費を押さえるとともに生産の増大も図らねばならないが、それには技術的裏付けに基づいた見通しが必要である。しかし当時の生産技術では新田開発などの生産増大が実用的な方策であって、近代資本主義を支える科学技術の発展の可能性はまだ見えない。そうした生産技術の発展と相俟って初めて蓄積が意味を持ってくる。基本的に儒官であって技術者でない青陵にはまだ新たな生産手段の開発という展望はないが、階級の如何を問わず勤勉な経済主体を形成し、利益追求を肯定し（興利）、産物回しなどさまざまな政策と組み合わせて、国を富ませることを追求した。

青陵の説く基本政策は、まさしく富国強兵で、富国、つまり「国ノ富ムシカケノ智」は「草木果穀ノウヘツケ」、さらに「新田墾成」、山の開発、など農業の振興と、「薬種魚鱗鳥獣昆虫ニ至ルマデ、他国ノ金ヲ自国へ引入ル」こと、つまり産物回しなどの交易によって利益を上げることで、これらはみな「富策」である。農工商は「富」の字の淵源と言うが、土

37)「稽古談」巻之四（『大系』310ページ）。
38)「稽古談」巻之四（『大系』311ページ）。
39)「稽古談」巻之四（『大系』310ページ）。

地が富の字の根元というように基本的に農業社会に基づいた考えである[40]。強兵としては攻守の備え、武士の練武、武具の制作、塀、石垣、池、堤、城砦陣屋の普請などがみな「強策」としてあげられている。他方、儒者には文章を書かせ、医者には医案を書かせて、「手足心思ノ閑暇」が生じないようにする。このように国民がみな「手足心思」が閑暇でなければ、国は富むに違いないという[41]。青陵の理解では、国が富まないのは、手足心思が閑暇な人々がいる、つまり「喰ツブシ」をしている遊休な労働力が存在し、勤労のエートスが十分でないからである。

ところで従来重商主義政策とされたこの産物回しだが、これもイデオロギー的に理解しているのが、青陵の特徴といえよう。青陵によれば、産物回しとは、一国が一体となって、他国の金を吸い取るというものであるが、これは豊臣秀吉の朝鮮攻めの仕組みと同じ方法だというのだ。秀吉は、国内に戦いがあって止むことがないので、外国を攻めることにしたとし、外敵をもうけることによって、国内の団結・統治を固めたというのである。国内のさまざまな利害対立を外敵を作ることにより緩和し、挙国一致の態勢を作ることは、古今より見られる常套手段であろう。「上下交々（こもごも）相敵トスルハ、コレ甚下手ナルコト」だからだ[42]。産物回しは、富を得る手段というだけでなく、そうした政治効果を持つことを明確に指摘しているのは特筆に値する。

そしてまた上下の階級対立を産み出しかねない「マキアゲ」（為政者が人民からさまざまな名目で税をかけて富を巻き上げること）も、民にそれと認識されないように少しずつ順々に行うことを説くのである。いつ巻き上げたのか、「一向ニ民ニハ見エヌ」というのが上手なやり方だというのだ[43]。

「マキアゲ」を主張する一方で、青陵には勤労に基づく公平な富の分配という観念もある。これが青陵が随所でしばしば説く信賞必罰と同じ論理なのが面白いところで、次のように主張する[44]。人の「功」に応じて「賞」を与え、人の「罪」を量って、それだけの「罰」を下す。これを「天理」という。また人が自分の「功」を数えて、それだけの「賞」を受け、自分の「罰」を数えて、それだけの「罪」を受けるのは「明察」だからで、これを「人道」という。すなわちこれがいわゆる「メノコ算用」だ。古より君子が心を労し、小人が力を労すというのはこの人道のメノコ算用である。さて、統治階級である「君子」は、知行取り扶持取り切米取りといっているから実際は武士階級である。また「小人」は農・工・商という。士というものは、ただ勤労しなくても「喰フ」ものだと思っている人が多いようだが、何もしなくてただ「喰フ」ということは、「天理人道」には決してないことである。働くのは自分の「功」で、金を得るのは「天ヨリ下サル賞」だという。つまり信賞必罰の論理からして、勤労という功には賞として金銭が与えられ、働かなければ対価は得られない。「働キダケノ食ヲ得ルガ筋ナリ」なのだ。ここで、君子は心を労するといっているように、武士の働きは統治の精神労働だと考えていると思われる。それに対して農工商の働きは力を

40）「枢密談」（『全集』161－162ページ）
41）「枢密談」（『全集』161ページ）。
42）「稽古談」巻之五（『大系』323ページ）。
43）「稽古談」巻之五（『大系』324ページ）。
44）「枢密談」（『全集』158ページ）。

労するといっているところから、肉体労働を念頭に置いていると思われる。

さらに興味深いのは、ここで仁政の概念が出てくることである。富んだ農工商の中には、武士同様、働かずにただ「喰フ」と思っている者が大勢いるが、これは天の罰を蒙る[45]。これはむごいことだ。執政者がこれを黙止して見ているというのは、下の者が天の罰を蒙るのを手をこまねいて見ていたという意味で、上の者が下の者を「ニガニガシキ目」にあわせたといえる。これは下の者をむごい目に遭わせることであり仁政とはいえない、とする[46]。これは、もちろん普通の意味での仁政とはまったく違う。拙稿でも指摘したが、青陵は、別の所で国を豊かにするためには民を「責メテ働カスハ仁政」と述べており[47]、それと軌を一にしていて、仁政とは儒教的な愛民の王道政治ではなく、統治者として被支配者が不幸にならないように手段を講じることを指している。たとえそれが、国民を「責める」ことであっても、それを厭わないリアリズムの政治である[48]。

3．枢密賞

さて武士階級は、戦乱の世の中では馬前にて討ち死にするという建前であったから、「常ハ喰ツブシ」であるが、一応「算用」があっていた。貢献と報酬が釣り合っていたというのである。しかし乱世ではなく治世においては、これが合わない。これは天に対して言い訳が立たず、天の罰を蒙ることになるから、上の者が救ってやらねばならないという[49]。その政策が枢密賞である。枢密賞とは古にもないもので、名称も青陵がつけたとその独自性を自画自賛している[50]。枢密賞は、先王聖人が民を叱らなくても強いて法令を実施しようとしなくても、自然と「手足ノ動クシカケ」によって、為政者の目的が実行される仕組みを指す[51]。つまり人間の利己心を利用して、富の増産へと鼓舞激励する政策である。これは士農工商すべての階級に適用するものである。とりわけ工商は世の中の変化に対応できるのに、士と農は対応できないのは、働き方を知らないからで、士は禄をはんで飢えるということがない、農も田地から出るものを食べているので飢えるということがなく、ともに出精して働くエートスがない[52]。それを勤勉な経済主体へと作り替えるのが枢密賞である。

枢密賞を武士に適用する利点は、ポストに就いていない武士の次男・三男、あるいは就いていても暇な「広間面番」など、あるいは夏の日の長いのを退屈して日の暮れるのを待っているような暇な武士に武具制作などをさせて遊休労働力を活用できること[53]（「ブラリ」と遊んでいる者が、手を働かせ財を生じることはその国にとって利益が莫大だと言って、推奨

45）どういうメカニズムで天の罰を蒙るのかは説明がないが、青陵は、働かず「唯喰フ」ことは「天」に対して「イイワケ」ないとか、と述べており、伝統的な「天道」観念に基づいていることが分かる。「枢密談」（『全集』159ページ）参照。
46）「枢密談」（『全集』158-159ページ）。
47）「経済話」（『大系』386ページ）。
48）拙稿「海保青陵の政治言説における能力原理」『大阪商業大学論集』151・152号合併号、2009年、258ページ。
49）「枢密談」（『全集』159ページ）。
50）「稽古談」巻之三（『大系』283ページ）。
51）「稽古談」巻之四（『大系』290ページ）。
52）「稽古談」巻之三（『大系』285ページ）。
53）「稽古談」巻之三（『大系』288、291ページ）。

している）[54]、またそれにより武具購入の経費を節約できること、さらに足軽には内職を推進できることなどがあげられている[55]。その結果、本来戦闘要員で治世の世に適合しない武士のエートスを「真ノ武士」として維持できるとしている[56]。

身分制から生じる遊休労働力の活用をこのように進めることにより、国富が増進され、さらに信賞必罰の原理にもかなって貢献と報酬の釣り合いを改善することができる。現実には馬前で討ち死にすると口では言いながら、怠惰に暮らしている輩が多いからである[57]。

しかしこのように怠惰なのは、決してその人たちの罪でない。青陵は「上」の養い次第で「下」はどうにでもなると考えるので、「下」に「喰ツブシ」が多いのは、「上」の政事に行き届かないところがあるからである[58]。従って「上」は、「下」を鼓舞して「喰ツブシ」の生じないようしなければならない。

さてどのように鼓舞するかと言えば、青陵の人間観によると、人の最も喜ぶものは「名利」である。「名」とは格式が上がったり、上から言葉を賜ったりする名誉であり、「利」とは貨殖、加増などの利益である。名利によって人間を鼓舞するのは、「ゼンマイカラクリ」と同じで、ここをねじればあそこが動くというように、文字通りメカニズムとして人間の心理と行動をとらえ、操作することを主張している。だから「枢」、つまり「機械仕掛け、からくり」というのだという[59]。このように人間をメカニズムとしてとらえる理解は、日本思想史上極めて珍しいのではないかと思われる。

さらにもう一つ、枢密という理由がある。もしこの方策が百姓に知られると、百姓は「ウカレアンバイヨフナキモノ」になる。つまり手の内が知られてしまい、百姓は意図したようには鼓舞されなくなるというのである。それゆえ、ごくごく枢密であるゆえに枢密と名付けられる。組織上も機密を守るため、この方策に携わる人の数を少数に限定し、枢密に携わる者はお互いを知らないようにする[60]。これから枢密とは為政者が人民を操作する方策の一つであることが分かる。またその真の意図を人民に知られまいとするところから、真の意図と表向きの意図との二重構造を持っている点で、イデオロギーの性格を帯びていることも分かる。

さて江戸時代は農業社会であるから、農業の枢密賞は重要である。農業の枢密賞の仕掛けは多くあるが、詰まるところは、百姓に出精させることであり、百姓が出精すれば、「国産」が多くなって、交易により、自国へ他国の金を「吸入レル」ことができる[61]。従って青陵の富国策は農業の生産増加をテコにしていることが分かる。

さて農業の場合、特に農家の次男・三男で農業、林業、漁業に巧みな者、つまりおよそ「国中ニ物ノフエル事ヲ工夫スル男」、「物ヲ作リテ物ヲフヤス男」がいれば、褒美をやって鼓舞する[62]。百姓の場合、商人と違って、君主をはなはだありがたるものであるから、これは有効だという[63]。ここで重要なのは褒美をやる際の口上で、とにかく国益に貢献したこと

54)「枢密談」(『全集』160ページ)。
55)「稽古談」巻之四（『大系』303ページ)。
56)「稽古談」巻之三（『大系』287－288ページ)。
57)「枢密談」(『全集』160－161ページ)。
58)「枢密談」(『全集』161ページ)。
59) 同上。
60) 勝手掛りの大夫が一人、番頭一人、組頭一人。「枢密談」(『全集』162ページ)。
61)「枢密談」(『全集』162ページ)。
62)「枢密談」(『全集』163ページ)。

を第一にあげる、そして「喰ツブシ」もしなかったことが殊勝だと誉めることだという。それに対して武士に対しては「武事」に心がけることが奇特だと誉める。商人に対しては他国へ商売を拡大したことを誉める。そしておよそ士農工商ともに他国に勝ったと誉めることが「国家ノ経済ノ術」であるという[64]。これが興味深いのは、青陵がこと細かに人民の心理に注意を払っていることである。職業・階級により心性と関心事が異なるので、それぞれの階級ごとにイデオロギー的に最も有効な誉め言葉を与えるよう配慮しているのである。

そして「織物」は京都にかなわないとか、「打物」は堺にかなわないとか、「箱ヲサス事」は京都にかなわないとか、およそ何ごとにせよ、自国が他国にかなわないと言うことは国の恥だと「下々」が心得るように「アヤツル」ことが必要で、自国の製品は他国のものよりいいものだから、他国もそれをほしがるというようにしないと「民勧マヌナリ」という。劣等感をもっていて、競争を最初からあきらめるようでは自国製品を売り込むことはできない。そこで「アヤツル」ことにより鼓舞激励しプライドをもたせて、心理的に競争に参入できるようにすることが必要だという。「気ヲヲトサヌヨフニ」、「引立テルヨフニ」するのである[65]。そして農工商は「チカラヲ労スル」、つまり労働に出精するのが持ち前であり、彼らに忠義仁義を勧めるのは国を貧困に陥れることになるのである[66]。

枢密で最も重要なのは商人の使い方である。自国の金を他国へ取られてしまうのも、逆に他国の金を吸い取るのも商人の働きであり、しかも智があり、「利」ということにかけては商人が一番の巧者である。しかしここでは、商品の相場の安い時に買い、高い時に売り抜けるという投機が商人の智として説かれているが、直接、生産力の増進は説かれていない。ただ「上」が買い上げるというと、権柄ずくで、役人が叱るし、品物が悪いと罰を蒙る。しかし他国の者が買うと喜ぶ。他国の者は遠方より逗留し、品物をわざわざ持ち帰ってそれでも採算がとれるような値段で買うのだから、自国の者が買えば、余計な経費がかかっていない分、他国商人より高く買えるはずである。そこで藩の方で、才知の町年寄りを枢密商人に仕立てて買い付けをすれば、他国の商人が得ている利益を手に入れることができるはずである[67]。結局、青陵がここで説いているのは、流通過程で生じる利益を自国が得るための方策である。

自国の人民と利を争っている国がたくさんあるが、これは「真ノ下手経済」である。自国の人民の金を引き上げるのは自分の金を引き上げるのに等しい。自国の人民と争う暇があれば、それを他国の人民と争うことに費やせば、自国民もありがたがって味方になるという[68]。

枢密の役割について、別のことも述べている。国内にとりわけ遊民などが仲買人となって醇朴な山の民などの生産者から買い占め、中間利益を貪ることがあれば、いくら醇朴なる者でも犴猾の者にいじめられると、怒って出精しなくなる。しかし枢密を導入すれば、些細なことまで上に知られるから、改善されるという[69]。ということは、枢密を担当する者は流通

63）逆に言うと、商人が武士をどう見ていたかがよく分かる。
64）「枢密談」（『全集』163ページ）。
65）同上。
66）同上。
67）「枢密談」（『全集』164－165ページ）。
68）「枢密談」（『全集』165－166ページ）。
69）「枢密談」（『全集』167ページ）。

過程に精通し、取り締まりのための情報提供を担うことになる。だから枢密は目付のもつべき役だといい、元締めは倹約を司るという。

さらに枢密を担当する役人たちも年に12回寄り合いを持ち、そこで工夫を言うもの、言わないものを賞罰しろという[70]。

枢密の要諦は信賞必罰なので、以下のような提案をする。今の世は、陪臣に到るまで世録で、加増も知行を削るのも稀だ。大抵は功罪あって賞罰すべきことでも、加地削地には及ばない。そもそも賞は人を勧めるもので、罰は人を懲らしめるものだが、今は功績があっても賞が少ないし、罪があっても少々の罰である。ゆえに人を勧懲しない。それは賞をたくさん与えると原資が足りないからであり、また賞がわずかで罰ばかり大きいと恨みを買うからである。これでは国が貧困になってしまう。加増しにくいのは、それが世録になるからである。そこで青陵は、「歳果ノ法」を提案する。それは功績があれば、その年一年に限って収入を多くすることで、もしまた翌年も功績があれば、その年も収入を多くする。このように必ず賞罰することを治国と呼ぶ。このようにして身分原理に安住している者たちを叱咤激励する。一部能力原理の導入である。なおこれは武士の場合だが、農工商は米を取り上げにくいので、米あるいは金銭で褒美を与えたり過料を科したりする。これを勧懲する枢機秘密と呼んでいる[71]。

およそ人間は利益のあることであれば励み、自己に利益がなければ励まないという利己的人間観に青陵は立っているのである[72]。また「民」は仁義ということも、功罪ということも知らないものであり、自分に利益があればそちらへ行き、害ある方を避けるという。この言明はまさしく功利主義的であり、基本的人間観は功利主義と同じである。ただ近代功利主義に見られる統計主義の要素を欠いてはいるが。

ここで興味深いのは、こうした功利的な人間観に基づいて青陵は枢密賞を説き、それがこれまで見たように、士農工商すべてに適用されるが、それは武士も同じ人間観に立っていることを意味していることである。青陵は先に述べたように、「民」は仁義を知らないといい、武士に忠孝仁義の徳目を認めることがあるが、ここから、それは世間の通念に従ったまでで、青陵自身の考えとしては功利的人間像を抱いていることが分かる。つまり忠孝仁義などリアリストの青陵は、本当のところはおそらく信じていないのである。

4．おわりに

青陵が自画自賛する枢密賞は、人間の利己心に訴え、イデオロギー操作により国富の増進を図るもので、それにより勤勉な経済主体のエートスが形成されることを狙ったものだった。青陵のイデオロギー論にはほかに興味深い点もあるので、それについては別稿を用意したい。

70）「枢密談」（『全集』170ページ）。
71）「枢密談」（『全集』170－171ページ）。
72）「枢密談」（『全集』172ページ）。

原典

蔵並省自編『海保青陵全集』人千代出版、1976年。
塚谷晃弘・蔵並省自（校注）『本多利明 海保青陵』（日本思想大系44）1970年、岩波書店。

参考文献

アルチュセール、ルイ『再生産について』西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳、平凡社、2005年。
イーグルトン、テリー『イデオロギーとは何か』平凡社、1999年。
ウイナー、フィリップ・P編『西洋思想大事典』平凡社、1990年。
プラトン『国家』（岩波文庫ほか各種翻訳あり）。
武内義雄『中国思想史』岩波書店、1957年。
溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』東京大学出版会、2007年。
松浦玲「江戸後期の経済思想」（岩波講座『日本歴史』第13巻）、1964年。
森岡邦泰『深層のフランス啓蒙思想』晃洋書房、2003年。
森岡邦泰「海保青陵の政治言説における能力原理」『大阪商業大学論集』151－152号合併号、2009年、247－261ページ。